様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７００６３８

研究課題名（和文）運動部活動において指導者の成長をもたらす葛藤体験とその影響

研究課題名（英文）Influence and characteristics of the psychological process associated with self conflict experience that lead to coaches' personal development in school athletic club activities

研究代表者
小谷　克彦（KOTANI, Katsuhiko）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：４０５９８７９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：　運動部活動において指導者が遭遇する葛藤は，指導者にとって悩みを引き起こすだけでなく，指導者にとって成長するきっかけにもなる．本研究では，部活動において成長を伴う指導者の葛藤体験を明らかにすることを目的に，次の下位検討課題を設定して取り組まれた．（１）肯定的な側面を考慮した葛藤体験による指導観および指導行動の変化の同定，（２）指導者の成長を伴う葛藤体験における心理的過程の特徴．これらの検討課題から，指導者が直面する葛藤体験は，指導者自身にとって成長・発達を果たすきっかけとなることが明らかとなった．

研究成果の概要（英文）：The self-conflicts that coaches experience in athletic club activities are not only causes of trouble, they also offer an opportunity for coaches to grow mentally. The purpose of this study was to examine the experience of self-conflict that leads coaches to growth of mentally in school athletic club activities. In order to achieve this purpose, two sub-research tasks were set as follows: 1) to identify the coaches' changes in their own values and coaching behaviors after they experienced self-conflict. 2) to clarify the psychological process associated with self-conflict experience that leads to coaches' personal development in school athletic club activities. The accomplishment of the two research assignments made it clear that the experience of facing self-conflict in school athletic club activities offers an opportunity for coaches to grow mentally.

研究分野：スポーツ科学

キーワード：指導者　葛藤　成長

１．研究開始当初の背景

運動部活動（以下“部活動）の指導をする中で，指導者は生徒の反発，勝つことへの過度なプレッシャー，そして周囲からの過剰な批判など，実に多様な問題事象に遭遇している．そして，その中で様々な葛藤を体験している指導者も少なくない．このような葛藤を繰り返し体験することで，指導者はストレスを強め，指導に悪影響を及ぼすことになりかねない．指導者という存在が，生徒の競技力だけでなく心理社会的な発達を左右する存在であることを合わせて考えると，指導場面で直面する葛藤に対して，指導者がどのように関わっているのかということを明らかにすることは，悩みを抱える指導者に対する心理面からの支援を考える上で重要な課題である．

指導者の葛藤事象に関するこれまでの研究では，葛藤そのものを扱うのではなく，ストレスやバーンアウトといった観点から進められてきた（例えば，Sage, 1987; Dale and Weinberg, 1990; Vealey et al., 1992; Kelley, 1994）．そして，それらの研究では指導者を不適応に陥らせる要因の抽出と対策が検討されているが，そこでの主な観点はストレス症状を低減することであった．つまり，これまでの研究は，指導者にとってストレスを強めるものといった葛藤の否定的側面のみに焦点が当てられたものであると言える．

しかしながら，部活動指導において指導者が抱く葛藤は，悩みを深めるだけでなく，指導者自身が変化し，成長するきっかけになることもある．生徒への指導援助に関わる問題で葛藤を抱くような場合，その問題への対応の中で生徒のちょっとした変化をみることで，指導することの喜びややりがい感を高めることもある．また，葛藤を解決することで，指導者自身の自信を高めることにもなる．安藤（2005）は，教師が抱く葛藤に対して，「様々な側面から教師によせられる理想的な教師の行動への期待を多く認識し，自覚し，それらをどのように自らの教師としての行動の中に取り込んでいくかについて，考えを深める契機として重要な意味を持っている」と指摘している．このように考えると，指導者が抱く葛藤は，自身が置かれている現状を見つめ直し，考えを深め，自身の態度を模索するような体験となるとも考えられる．

先述の通り，指導者が抱く葛藤に関する先行研究では，ストレスを治めるといった視点で行われているが，葛藤に取り組み指導者自身が成長を果たすといった視点を考慮した研究は少ない．ストレスを低減するという観点に立った対策では，指導者が葛藤の解決を通して自身が置かれている現状を見つめ直し，そして自身の指導を改めるといった成長の機会を失いかねない．そのため，葛藤に含まれる否定的側面だけでなく，肯定的な側面にも注目する必要がある．

指導者の葛藤体験については，小谷・中込（2003，2008）の一連の研究で検討されてきている．これらの研究では，葛藤を抱く中で指導者は指導観や自他観といった価値観の混乱が生じていると指摘している．つまり，これらの知見からは指導者が葛藤を解決していく過程で，同時に指導観及び自他観を確立していくという作業もしていることを推測することができる．しかし，葛藤が含み持つ積極的意味の可能性を示唆するに留まっており，葛藤体験を経た成長やそのような変化をもたらす心理的過程に関する実証的説明は充分に行ってきてない．

このような指導者の葛藤体験を明確にすることで，葛藤を抱える指導者が有効な対処法を模索するための新たな手がかりを提供することができる．

２．研究の目的

本研究では，指導者の成長を伴う葛藤体験に焦点を当て，そのような変化をもたらす心理的過程とその影響を検討する．そして，積極的側面も含めた葛藤が含み持つ意味について明らかにすることを目的とする．そのために，まず肯定的側面を考慮した葛藤体験による変化を同定し，その後に肯定的な変化をもたらす葛藤体験の心理的過程を事例研究から明らかにした．

３．研究の方法

（１）分析対象者及び調査内容：中学校や高等学校で部活動を指導している指導者 110 名を対象に，部活動での問題事象に関する自由記述質問紙を実施した．その結果，質問紙の記述内容が葛藤事象であった 22 名を分析対象とし，葛藤体験による変化の同定を試みた．また，その中から葛藤体験に関する記述が顕著であった 8 名に面接調査を実施し，さらにその名から 4 名を事例研究の分析対象者として，葛藤体験における心理過程とその影響についての検討を試みた．

（２）分析方法：葛藤体験による変化の同定に関しては，22 名の自由記述調査のデータを元に「指導観の変化」と「指導行動の変化」の２つの観点から，それぞれ PAC 分析（個人別態度構造分析）を用いて分析を行った．葛藤体験の心理的過程に関しては，4 名の指導者を対象に半構造化面接を実施し，そこで得られたデータを元に物語を作成し，事例検討を行った．さらに事例検討では，1 つの問題事象での体験だけでなく，その前後の体験を含めた長期の体験を対象とし，分析を行った．

４．研究成果

（１）葛藤体験による変化：葛藤体験による指導者の変化を「指導観の変化」と「指導行動の変化」の２つの観点から同定を試みたところ，それぞれにおいて以下の変化が認められた．

指導観の変化に関しては，指導観の転換，指導観の拡大，指導観の強化，向上心，あき

らめといった５つの変化が明らかになった．つまり，指導観の変化には，指導方法を転換するという変化だけではなく，“指導観の拡大”といった考え方そのものの観点を広げることで得られる視点も含んでいると言える．指導者は葛藤を抱くような問題事象に遭遇した際，悩む中で指導の方向性を転換するだけでなく，指導観そのものをひろげて，多角的な視点で問題事象を捉えるようになると考えられる．一方，指導観の強化や向上心といった変化では，これまでの方向性を再確認したり，指導方法を学びなおしたりすることで，それまでとは異なった視点を得られることもある．しかし，これまでの考えを強化させすぎてしまい，逆に視野を狭くしてしまうことも考えられる．さらに，否定的なイメージが強い“あきらめ”であるが，葛藤の解決をあきらめることを通して，指導者は生徒や問題事象に対して適度な距離を取ることができ，その結果として，指導者は指導を充実させることができる場合もあると考えられる．指導観の強化やあきらめについて考えられる肯定的・否定的な 2 側面に関しては，事例検討について検討した．

次に，指導行動の変化に関しては，指導の見直し，柔軟な関わり，閉鎖的・防衛的な関わりの３つの変化が認められた．柔軟な関わりへの変化は，指導の見直しに繋がる変化であると思われるが，指導の見直しに比べ，柔軟な関わりへの変化は，他者に開けた態度への変化であると考えられる．小谷・中込（2012）は，指導者が葛藤への対処過程の終盤において，他者に対する理解の深まりと自己に対する理解の深まりの間で相互作用が生じ，その結果として問題事象に対する新たな理解につながると指摘している．すなわち，“指導の見直し”が自己に対する理解の深まりに関する変化につながり，“柔軟な関わり”が他者に対する理解の深まりに関する変化につながっていると考えられる．

葛藤体験による変化として，指導観の拡大・転換や指導の見直し・柔軟な関わりといった肯定的な変化が多数確認することができた．しかしながら，葛藤体験の多くが積極的な側面での変化に直結しているとは考えがたい．つまり，積極的側面の変化に至る前に，あきらめや閉鎖的・防衛的な関わりといった一見否定的に思える変化を経験しているのではないかと考えられる．そのため，次の検討課題では，あきらめや閉鎖的・防衛的な関わりがその後の指導者にどのような変化をもたらしているのかといった視点も含めて，葛藤体験の心理的過程について検討することにする．

（２）葛藤体験の心理的過程：ここでは，葛藤体験によって指導観や指導行動が変化した経験をしていると思われる４名の指導者の事例から葛藤体験の心理的過程を検討した．

葛藤体験による指導者の心理的過程としては，４つの過程を踏むことが確認できた．まず指導者は，転機となるような出来事に遭遇し，その中で「指導観の揺らぎ」を経験する．指導者は，部活動指導をしていく上で，時にそれまでのやり方が上手くいかなくなるような出来事に遭遇し，それが指導観を変容させる転機となることがある．本研究での事例の多くは，転任による環境の変化や生徒の変化であった．ある指導者は，転任することによって初めて強豪チームを指導することになり，不安とプレッシャーを抱く．そして，「自分のやり方でやらなければいけない」という思いを強く持ち，誰にも頼ることなく指導に取り組むが，期待するような結果を出すことができず，焦りが増すばかりであった．杉浦（2004）は，転機のプロセスの始まりには，それまでのやり方の自然な“終わり”を経験すると指摘し，その経験では，それまでのあり方が通用しなくなったことへの気づき（覚醒），アイデンティティ喪失と方向感覚の喪失を経験すると述べている．例えば，「自分のやり方でやらなければいけない」という思いを強く持つが，現状は上手くいかず方向感覚を喪失してしまうと言える．また，様々な生徒の意見に対応した指導を考えるうちに「どっちが本当の自分の姿なのか」と指導者としてのアイデンティティを喪失してしまうことも考えられる．このように，転機となるような出来事に遭遇した指導者は，それまでのやり方が通用しなくなり，それまでの指導観が揺らぐことになる．

次に指導者は，「負のサイクルによる八方ふさがり状態」を経験する．部活動において，それまでのやり方が通用しないような出来事に遭遇した指導者は，直ちに新しい指導観を模索するようになるとは限らない．つまり，「やらなければいけないけれども，できない」，そして，「現状も変わらない」といったサイクルから抜け出せない．やればやるほど労力を消費し，焦りや不安も増して，八方ふさがりの状態から抜け出せなくなるといった負のサイクルに陥ると考えられる．しかしながら，指導者は，このような負のサイクルから抜け出せずに留まらざるを得なくなることで，その原因を探り始め，様々なことに気づくようになる．八方ふさがりの状態は，指導者にとって苦悩を伴う大変な時期ではあるが，指導者が成長・発達を果たすための重要な期間でもあると考えられる．指導現場において指導者は，様々な問題に目を向けることを強いられる．つまり，考えなければいけない問題が多いために，今直面している問題に専念することができず，自身の指導観が揺らがされていることに気がつかないことが多いように思える．すなわち，指導者は，八方ふさがりの状態に陥ることではじめて指導観の揺らぎという本質的な問題に目が向くことができるようになるのではないかと考えられる．杉浦（2004）は，転機には何らかの空白もしくは無為の時期があると述

べ，そのような時期においては，絶望感や虚無感に苦しめられるが，不思議な安堵感が生まれ，そのなかで人は自己を客観視するようになり，物事に対する新しい解釈が見出されると指摘している．また，教師の自己変容は教師が自身の指導行為を自覚および反省することから始まると小島（2000）が述べているように，負のサイクルから抜け出せずに留まることで，指導者は，それまでの指導における自分の態度に対して問い直しを強いられることになっていると考えられる．そして，問い直すなかで，負のサイクルに留まる原因とも言える自身の指導における「拘り」を自覚するとともに，新しい方向への突破口を見出すことになるのではないかと考えられる．

八方ふさがりの状態を経験した後，指導者は「正のサイクルによるゆとり・自信の獲得」を経験する．指導者は，これまでの自身の指導を問い直すなかで，自分の過度に執着していたそれまでを自覚するとともに，新しい方向性を見出す，もしくは新しい方向性を見出すきっかけとなる出来事と遭遇する．しかしながら，１つの出来事でそのような新しい方向性を見出せることは少ないように思える．また，見出せたとしても，そこで見出した新しい方向性はまだ不明確であり，新たな指導観を確立したとは言い難い．「自分のやり方でやらなければ…」ということに強い拘りを持っていた指導者は，他の指導者と交流し始めるようになり，拘りが弱まり，ゆとりが生まれて視野が広まっていた．そして，ゆとりを持って指導に携わり続けることによって，徐々に自信を強めていた．このように，試合の結果や生徒の変化が認められるなど，指導の効果が少しでも実感できれば，それが指導者にとって自信となり，指導への活力となって，指導に対してゆとりが生まれるといった正のサイクルを繰り返すことによって，新たな指導観を模索し，固めていくことになると考えられる．小島（2000）は，教師が学校で生じる様々な問題に対応するためには，教師の連続的な自己変容が必要であると指摘しているように，１つの葛藤状況に対して直ちに解決することができなくても，日頃の指導活動の積み重ねのなかから，ゆとりや自信を獲得し，問題事象に対する捉え方が変わっていくといった連続的な自己変容を経ることで，自然と葛藤を抱くことがなくなっていくことも考えられる．また，成人期の発達過程について，「安定期」と「移行期」を繰り返しながら変化していくといった主張（Levinson，1978）や，心理的な退行と再編成を繰り返して成長を果たすといった主張（岡本，1994）にみられるように，指導者は負のサイクルと正のサイクルを繰り返すことによって，ゆとりや自信を獲得していき，新たな指導観を模索していっていると考えられる．

最後に，指導者は「新たな指導観の獲得と新たな問題への発展」に至る．負のサイクルと正のサイクルを積み重ね，新たな指導観を固めていく指導者は，視野が広がった（視点が変わった）ことで，現象に対する捉え方も異なり，新たな問題に遭遇し，さらなる成長に向けて葛藤と向き合うことになる．例えば，誰かに頼ってはいけないと思い続けていた指導者は，負のサイクルと正のサイクルを積み重ねるにつれてそのような拘りが和らぎ，色々な人からの言葉を素直に聞けるようになっていた．そして，チームがさらに上の段階に進むためには，「逆にマネをされる」ような指導者に自分がならなければいけないと考え，新たな問題に取り組んでいた．網谷（2001）や都丸・庄司（2005）が指摘しているように，悩みを抱くような指導経験は，問題の捉え方や生徒との対応に変化をもたらすと言える．さらには，そのような視点の変化が，新たな問題に対する自覚に繋がり，そこで新たな葛藤を抱き，さらなる成長・発達の機会を得ることになると考えられる．

以上のように，部活動において指導者は，様々な問題事象に遭遇するなかで，葛藤体験を繰り返し，指導者自身の指導観の幅を広げ，指導者として成長・発達を繰り返しながら，部活動指導に携わっていると考えられる．したがって，部活動指導のなかで指導者が直面する葛藤体験は，指導者自身が成長・発達を果たす意味を持つものであると言える．

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計４件）

① KOTANI, K. & TAKEDA, D. The relationship of self-conflict and leadership styles from the interpersonal relations in school athletic club coaches. 14th European Congress of Sport Psychology. University of Bern (Bern/Switzerland). 2015.7.15.

② 小谷克彦,「自信がない」と繰り返す女子学生アスリートに対する心理サポート．日本臨床心理身体運動学会第 17 回大会，関西国際大学（兵庫県・尼崎市），2014.12.13.

③ 小谷克彦，運動部活動における指導者の葛藤体験による指導の変化．日本スポーツ心理学会第 40 回大会，日本体育大学（東京・世田谷区），2013.11.2.

④ KOTANI, K., TAKEDA, D. & EDA, K. Internal tasks hidden in athletic performance problems in college athletes: analysis by the Landscape. 18th Annual Congress of The European College of Sport Science. The National Institute of Physical Education of Catalonia (Barcelona/Spain). 2013.6.28.

６．研究組織

(1)研究代表者
小谷　克彦（KOTANI Katsuhiko）
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：40598794